

# MOMASの扉スペシャル

2012年8月11日/11月3日 埼玉県立近代美術館



**埼** 玉県立近代美術館では、「MOMASの扉」という教育普及プログラムを毎週土曜日に開催しています。対象は主に子どもたちですが、プログラムによっては年齢制限がなく、初めて出会うさまざまな人たちとともに美術館での体験を楽しめる内容を工夫しています。開館30周年にあたる今年度は作品鑑賞や造形だけでなく、「美術館でこんなこともできるんだ!」と感じてもらえることに挑戦したいと考え、二つのプログラムを試みました。 **大越久子 (SMF運営委員)**

## 『からだでビジュツ感 —ほぐす・つながる・つくる—』

8月11日

新井英夫さん(体奏家/ダンスアーティスト)を講師に迎え、美術館という空間から感じたことをからだで表現するワークショップ



ブをおこないました。9歳から70歳までの幅広い年齢層の方36名が参加しました。当日は、吹き抜け空間、階段、エントランス・ロビーなどに身を置き、眼で見るだけでなく、からだを使って他者と交流し、そこから空間のおもしろさを感じ取る体験をしました。そのときに感じるからだの感覚や周囲の人びとの反応などによって空間をとらえていったのです。美術館ならではの空間のおもしろさや、思いがけない音の反響に気づいたり、偶然おこった行為が他の参加者の中に広がっていくよこびを感じたり、大人も子どもも発見の連続でした。

参加者の感想には、こうした体験が新鮮であったこと、子どもから大人まで年齢と関係なく親密になれたこと、からだや気持ちを温めるとたくさんを感じ、吸収することができる気がしたことなどが挙げられています。

今回のワークショップをきっかけに、美術館がみずからの教育資源を活用し、さまざまな世代がアートを通じて交流できる機会を提供する意義を再確認することができました。さらに活動を広げていければと考えています。 **山水明 (埼玉県立近代美術館)**

## 『音で奏でる美術館』

11月3日

尾引浩志さん(ホーメイ/口琴奏者)を講師に迎え、美術館の所蔵作品から感じたことを、身近な物を使って音で表現するワークショップをおこないました。4歳から大人まで、年齢も性別も違う24名の方が参加しました。

ワークショップの前半は、ストローや風船などを使った楽器づくりと音づくりの活動を十分に楽しみました。ふだん手にする物から想像もしないような音が出ることに驚いたり、物を組み合わせることによって生まれる音色に感心したり、参加者は多種多様な

「音」を存分に味わいました。

後半は展示室にある所蔵作品から感じたことを音で表現し、同じ作品を選んだ者同士がグループになって曲を作りました。それぞれが感じた違う音を重ねるとすてきなハーモニーが生まれ、不思議なことに鑑賞した作品の雰囲気やピッチリ合う曲ができました。まとめの発表会は、一般の来館者もいる常設展示室の作品の前。お互いの曲を聴き合うだけでなく、曲ができるまでの過程を聞き合うことで作品への新たな関心が高まりました。

美術作品と音とを組み合わせたプログラムは今回初めて実施したのですが、参加者にも楽しんでもらうことができたので、この経験をきっかけに美術とは異なるジャンルにも視点をあてて美術館でのワークショップの幅を広げていければと考えています。

**田中耕次 (埼玉県立近代美術館)**



コレオグラファーの目・スペシャル! vol.10

# 「みんなで選ぶMOMASコレクションベスト10」を踊る 「自作・音モンターージュ」で踊る

2012年11月10日 埼玉県立近代美術館



**6** 年の歳月を経て10回目を迎えた美術館ダンスパフォーマンス「コレオグラファーの目」。今回は、埼玉県立近代美術館30周年記念「みんなで選ぶMOMASコレクションベスト10」に選ばれた作品をモチーフに、7名のコレオグラファーがダンスを創作しました。また、昨年度の「音モンターージュワークショップ」で電子音楽の共同制作を試みたダンサーが、その音楽での作舞に挑戦しました。さらに、埼玉県舞踊協会の委嘱により上原尚美さん(2011年ニムラ舞踊賞受賞)が、コレクションの投票の1位に輝いた「風の中で」(公園の音楽噴水内にある西野康造さんのサキソフォンのオブジェ)をモチーフに新作を発表しました。これらの「多彩」なプログラムが、埼玉県立近代美術館および北浦和公園の7か所で展開されました。

さて、今回のプログラムを「多彩」と捉えたことには、上記3種の取り組みの他にも理由があります。その一つは、MOMASコレクションをモチーフにしたダンスの中には、コレクション作品の前で上演したものと、それ以外

の場所で上演したものがあつたことで、ともに、それぞれのコレオグラファーが独りでモチーフと向き合って創り上げた作品ですが、前者の場合、観客は上演中に繰り広げられる「コレクションとダンサーの思念のキャッチボール」を目の当たりにすることで、ダンサーの想像を追うことが容易になります。また、ダンスをとらえようと思いがちモチーフのコレクションに改めて対峙した時、そのコレクションの持つ魅力に気づくという体験をすることもあります。その逆もしかりです。同じ取り組みであっても、後者の場合には、モチーフとなるコレクションはコレオグラファーによって咀嚼しつくされ、創造へのきっかけへと変貌します。観客の前に提示されたダンスは、コレオグラファー独自の世界観へと変化を遂げており、観客はコレクションに思いを馳せるよりも、コレオグラファーの思念の世界へ踏み込むことになります。

「多彩」になったもう一つの理由には、他ジャンルアーティストとの共同制作が多かつたことが挙げられます。全9作品中6作品が、音楽・パフォーマンス・映像・美術のいずれかと

のセッションにより創り上げられていました。セッションによってダンスの枠にとどまらない発想が生まれ、具現化し、観客への多面的なアプローチへと変わっていったように思います。

「コレオグラファーの目」は、5回目よりSMFの活動に関わらせていただくことで多くのアーティストとの交流がおこなわれて、1回目には1作品もなかった他ジャンルアーティストとの共同制作が現在では半数以上にのぼります。また、パフォーマンスを重ねる中で、深みのある作品が少なくなっていた時期がありましたが、今回、展示作品の前で上演させていただき、そのことが刺激となって作品を掘り下げの姿勢を取り戻しはじめました。

「コレオグラファーの目」は、埼玉県立近代美術館の皆さん、SMFの皆さんをはじめ、多くの方がたに支えていただきながら歩んできた6年であったと思います。皆さんへの感謝の気持ちを記すとともに、未来への活力を想起させてくれた「コレオグラファーの目」出演者に拍手を送りたいと思います。(来場者:206名) **藤井香 (SMF運営委員)**

■コレオグラファー、ダンサー  
植木結子、上原尚美、江尻美由紀、江積志織、海保文江、久保田妙子、黒田なつ子、後藤かおり、佐々木治子、高橋純一、田嶋春佳、戸口末貴、林葉子、半澤昇、藤井彩加、細川麻実子、松元日奈子、守屋百々子、吉川詩織

■制作協力者  
浅沼英、浅見俊哉、安斉将、大澤加寿彦、君嶋桂吉、酒本恭輔、中村隆行、野本翔平、bozzo、松本一哉、森英嗣、吉川博規、吉原博紀